

「聞法聴聞の先に」

河野 智子

『^{ぶつせつかんむりょうじゆきょう} 仏説観無量寿経』^{じよぶん} 序分の学習会で、「^{おうしやじょう} 王舎城の悲劇」を知りました。この物語では、マガダ王国という国の中で起きたクーデターから、親子関係、王様と家臣との関係、そしてお釈迦さまと弟子との関係など、それぞれの登場人物が織り成す人間関係が^{ゆが}歪みを生じ、そこから悩み苦しみ怒り悲しみを通して、その中からお釈迦さまに出遇っていくというお話しが説かれています。その後主人公であるイダイケ^{ぶにん}夫人は、お釈迦様の教えを聞法聴聞して、心穏やかに暮らす眼を持つことができました。この物語は単なる昔話ではなく、現代に生きる私たちにも合い通じ合う事柄であり、聞法・聴聞の先に穏やかに暮らすことができる眼が育てられるのかもしれませんが。偉いお坊様方が大切に仏法を語り続け、長い時をかけ語り継がれてきたことは、聞法・聴聞してこられた人々の穏やかな暮らしの中に引き継がれて、現代のここにもあるはずでしょう。

『^{れんによしょうにんごいちだいきききがき} 蓮如上人御一代記聞書』にこうあります。「ただ、仏法は、聴聞にきわまることなり」。つまり「人間に生まれた意義と喜びを見い出す道は仏法聴聞のほかない」と法話集にありました。ただ私はまだわからず、今から仏法聴聞を重ねる日々の生活をしていきたいと思います。息を引き取るまで私に与えられた大切な宿題として背負っていきたいと思っています。

親鸞聖人は9歳の時、「明日ありと思う心のあだ桜 ^{よわ} 夜半に嵐の吹かぬものは」と言われてお得度を急がれ、仏道を歩んでいかれました。是非とも若いうちから仏法聴聞し、生まれた意義と生きる喜びを見い出していきたいものです。お聞き下さりありがとうございました。